

LA 学群におけるアクティブラーニングの取組み

FD 委員会 浅井 亜紀子・池田 美樹・鄭 百秀
長谷川(間瀬) 恵美・山岡 洋

1. 2016 年度リベラルアーツ学群の取組み

リベラルアーツ学群(以下、LA 学群)では、2016 年 2 月に行われた教員研修会において、学生の学力差への対応が課題となった。そこで、FD 委員会は、2016 年度の FD の方針を「LA 教員学び合いの共同体」として進めることにした。LA 学群のアイデンティティとしての「基礎学力を基盤とした学際的かつ主体的に学ぶことができる学生の育成」を可能にするために、LA 学群内で、具体的な教育実践とその効果を共有し、教員が学問領域を越えて互いに学び合うことにした。その一つの試みが、学生の主体的な学びを促すアクティブラーニングの活用である。2012 年に文部科学省が発表した答申では、大学教育の質的転換に向けての「アクティブラーニング」や反転授業の積極的活用があげられた¹。しかし、LA 学群では、この答申を受動的に受け入れるのではなく、学群のアイデンティティの一つとして、どのようにアクティブラーニングを活用できるのかを検討していくことにした。LA 学群の FD の取り組みは以下の表にまとめた(表 1 参照)。

表 1 2016 年度 LA 学群 FD におけるアクティブラーニングの学びのプログラム

回数	実施日	講師	タイトル	使用言語	参加人数(人)
1	6月29日 (水)	田中一孝	「なぜアクティブラーニングなのか ー求められてきた背景と哲学・思想系分野における実践ー」	日本語	67
2	7月27日 (水)	牧田東一	「サービス・ラーニングの既存科目への導入について」	日本語	37
		藁 智恵	「サービス・ラーニングをどのように授業に取り入れるか」		
3	10月26日 (水)	Marcos Benevides, Nicholas Delgrego, Mark Firth, & Richard Hawking	“Pedagogy for Learner Engagement”(学習者の参加を促す教授法)	英語	20
4	11月30日 (水)	田中暁龍	「アクティブラーニングと教員養成教育」	日本語	24
		木場英久	「アクティブラーニングの実践例」		
		小関俊祐	「認知行動療法に基づくアクティブラーニング」		

各回についての大略を以下にまとめたが、詳細については各先生方の原稿をお読みいただきたい。

第一回の田中一孝先生(哲学)には、アクティブラーニングの先駆的役割を果たしてきた京都大学高等教育研究開発推進センターでの経験から講義をしていただいた。LA学群の教員だけでなく、鈴木克夫大学教育開発センター長を含め多くの参加者を得ることができた。田中先生は、アクティブラーニングの背景を説明されたうえで、アクティブラーニングとは「一方的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習」と定義された。ディスカッションやディベート、課題ベース等、より主体的な取り組みを例にあげ、コメント用紙や発言などの双方向授業との違いを明確にされた。先生ご自身のゼミやLAセミナー(LA学群1年生を対象とした基礎ゼミ)でのアクティブラーニングの実践を紹介いただいた。

第二回は、牧田東一サービス・ラーニング・センター長と斐智恵先生(社会学)より、アクティブラーニングの一つの形態である「サービ斯拉ーニング」について講演いただいた。サービ斯拉ーニングによって、学生のコミュニケーション力や社会力の育成に役立つことを具体的に示された。サービ斯拉ーニングの意義と同時に、フィールド側と教員のコミュニケーションがいかに必要であるか、また、遅刻や欠席など学生の問題行動がフィールドに与える悪影響の可能性を提示された。渉外事業部地域・社会連携室の福原信広課長からもご意見いただく機会に恵まれ、サービ斯拉ーニングの支援体制について知ることができた。

第三回は、アクティブラーニングを積極的に授業で活用している外国語学習(ELP)の教員 Marcos Benevides 先生, Nicholas Delgrego 先生, Mark Firth 先生, Richard Hawking 先生共同による連携発表とワークショップが行われた。この回は、主に英語で行われた。ワークショップでは、事前に二つのビデオを視聴してからワークショップに参加することが教員に求められた。ビデオ1では、Moodleの活用法と反転学習法(教材を計画的にアップし、学生がダウンロードしレポート類を提出する、また外部の有用なサイトや資料にリンクするしくみ)が紹介された。ビデオ2では、アクティブラーニングの成果である学生のプレゼンテーションや動画の作品が紹介された。当日のワークショップでは、教員が実際どのようにグループ活動を促すかを体験した(回転寿司方式で学生を毎回ずらしてペアを組む、グループでの参加者の発言を促すなど)。また、学生が持っているインターネット・コミュニケーション・テクノロジーをどう活用していくかを知り、教員が各自の授業でアクティブラーニングをどう応用できるかを話し合った。本ワークショップは、同じLA学群の教員でありながら、交流する機会の少ない英語を母語とするネイティブの教員と日本人教員が互いを知り、学び合う場となった。

第四回は、異なる分野から3人の教員から具体的なアクティブラーニングの実践法や問題点について話題を提供いただいた。この回の特徴は、それぞれの教育分野の課題が浮かび上がったことである。田中暁龍先生(教育学)による「アクティブラーニングと教育養成法」では、教職希望の学生を指導する立場から、学習者が受けてきた中高の授業がいかに暗記型であり、そのため基本的な書く力(ノートをとる、文章を書く)が不足しているかを提示した。こうした穴埋めの教材を使用して暗記型の授業を受けてきた学生が、思考力を深める教材を作るのは難しく、教職の授業において、暗記の教授法との連鎖を断ち切る指導力が求められる、ということである。講演記録を掲載することは叶わなかったが、木場英久先生(生物学)による「アクティブラーニングの実践例」では、学生にとってわかりやすい授業の工夫や授業外での学生同士のディスカッションは従来からすでに行われており、特別なことではないということが指摘された。また、授業内ディスカッションについて、学生側が抱えている否定的感情や虚栄心の問題が示された。教員、学生側からの抵抗が指摘されたことにより、講義形式が効果的な場合もあるということを確認する機会となった。小関俊祐先生(心理学)「認知行動療法に基づくアクティブラーニング」では、人間の二者択一などの選択行動を決定するプロセスにおいて、個人にとっての「損」と「得」を天秤にかけ心理の原則を、さまざまな事例から理解させるアプローチが示された。その上で、その心理原則を活用して、自発的な行動を促すための工夫、たとえば、ある行動を選択する可能性を高めることを目的とした際に、その行動を選択することで個人にとっての「得」を伴わせるためにはどうすればよいかなどの、アクティブラーニングを促す心理学的手法が提示された。

2016年度のFDにおけるアクティブラーニングの取り組みは、以下の点が明らかにされた点において有効であったと考えている。

1. LA学群という学問領域を超えた教員同士が、異なる領域の学問について理解を深めるだけでなく、主体的な学びがどのように可能となるのかを考えるよい機会となった。
2. 英語を母語とする教員と日本語を母語とする教員が互いに学び合うことができたのは、大学内の文化的多様性を生かす試みであった。しかし、アクティブラーニングをどう活用するかには様々な要因が影響するであろう。たとえば、学ぶ内容(基礎となる理論か語学などのスキルか)、受講する学生側の要因(態度や能力、受講人数)と、教員側の要因(教員自身が受けてきた教育や訓練、自分の教授法に対する信念や自信、新しい教授法に対するオープンさ、教育志向・研究志向の強さ)などが考えられる。

3. FD会の参加率は決して好調とはいえない。その理由は、様々であろうが、教員の多忙を作り出す厳しい大学環境(会議の多さや業務の複雑化・細分化)があることは否めない。今後、LA学群としてのFDをより発展させていくためには、教員の多様なニーズや多忙状況に適うようなきめ細かな取り組みをしていくことが重要な課題となるだろう。そのためには、LA学群全体のFD会だけでなく、共通の学問や専門領域ごとの小規模なFDの活用が不可欠と考える。

注

- 1 文部科学省(2012):新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm

2016年12月15日検索



左上から：池田 美樹・鄭 百秀・
長谷川(間瀬) 恵美・山岡 洋
前：浅井 亜紀子